

## 25. もみさらい・土臼

脱穀した粳は、むしろに広げて数日のあいだ日に干した。乾いた粳は土臼にかけて数人で粳摺りをした。発動機屋が機械をもって回るようになり、土臼はすたれた。

### モミサライ

A は「もみさがし」で先幅 67cm、柄 160cm。B は「もみさらい」。麦わらを編んだ長いコモ（薦）に粳をひろげて干した（鳥飼八町）。弥生時代にも使われていた。

### 消えた土臼

粳から粳殻をむいて米粒を取り出す作業をもみすり（粳摺）といい、土臼で摺った。

C は「摂津国各郡農具略図」からの明治の島下郡の土臼でモミウス（粳磑）と書いてある。図の臼の胴は桶作りであるが、籠編みや木をくり抜いたものもある。土臼の重さは 80～90kg。重くて厄介と早く処分されたようで、寄贈農具リストにもなかった。

### 粘土に木歯を埋める

D は同じく明治の島上郡の土臼を外して摺り面を見せたところである。円を 6 分画に分けて目を入れているが、おそらく厳密に描かなかったもので、普通は石臼と同じく 8 分画である。臼の面は山土に塩を混ぜてつき固め、カシの木の歯を打ち込んである。

### 江戸初期には伝来

千里丘ではトウスと聞いた。唐臼の意味であろう。江戸時代の三河地方の農書『百姓伝記』には「寛永元年（1624）の頃、もろこし（中国）より土にて作るうす作り長崎に來り、日本の人に作りて見せ」た、土臼の普及でそれまでの木臼がすたれたと記されている。江戸時代の初期の伝来となるがそれ以前の絵画にも見える。伝来は一波とは限らない。

### ウスヒキ（臼挽き）

E は『絵本通宝志』に描かれた 18 世紀の大阪近郊の臼ひきの光景。「とう臼にてもみをするてい」と書かれていて、やはりトウス（唐臼）と呼んでいた。梁から吊るしたヤリギを前後して臼を回す。往復運動を回転運動に変えるからくりは中国人の得意技。

ウスヒキは 11 月～12 月、乾燥できたものからひいた。昔は夜に臼ひき歌を歌いながらやったこともあった。12 月にお寺で永代経が勤まる頃にはウスヒキは終わる（千里丘）。

土臼の修理には垂水のウスヤが毎年まわってきた（千里丘東）。

### ウスヒキヤ

発動機屋が機械をもって回るようになり土臼はすたれた。ヒキヤが機械もって回ってきた（別府）。発動機屋が 2 時間で仕上げた（千里丘）。機械化しても呼称はウスヒキヤ。

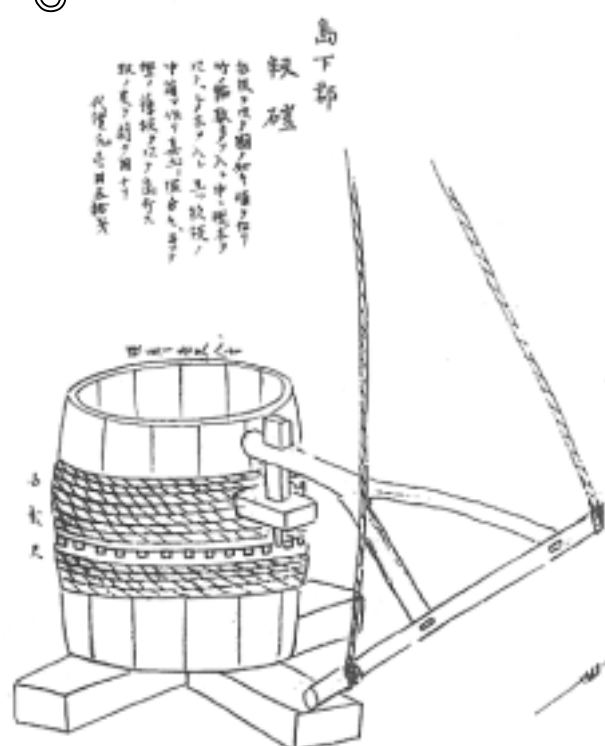
A



B



C



E



D

